

**I 第18週の発生動向 (2010/5/3~2010/5/9)**

1. 感染性胃腸炎については、県全体の届出数は大幅に減少しましたが、青森市保健所では多い状態が継続していることから注意が必要です。
2. インフルエンザについては、弘前保健所管内において1人(迅速診断キットによる型別:A型)の届出がありました。

**II 第18週五類感染症定点把握** 注:五類感染症定点把握疾病の警報・注意報については、二次保健医療圏単位で判定しています。

青森県内の定点(医療機関)数については青森県感染症発生動向調査TOPページをご覧ください。

疾患名	東地方+青森市		弘前		八戸		五所川原		上十三		むつ		青森県計		増減数 (前週からの増減)	東地方(再掲)		青森市(再掲)		
	数	人/定点	数	人/定点	数	人/定点	数	人/定点	数	人/定点	数	人/定点	数	人/定点		数	人/定点	数	人/定点	
小児科 +内科 (85) インフルエンザ			1	0.1									1	0.0	1					
小児科	(74) RSウイルス感染症	1	0.1	1	0.1	2	0.2						4	0.1	1			1	0.1	
	(75) 咽頭結膜熱	1	0.1							1	0.2	8	2.0	10	0.2	-5			1	0.1
	(76) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	6	0.7	4	0.4	3	0.3	1	0.2	7	1.2	3	0.8	24	0.6	-12			6	0.8
	(77) 感染性胃腸炎	72	8.0	19	2.1	14	1.6	19	3.8	16	2.7	21	5.3	161	3.8	-116	17	17.0	55	6.9
	(78) 水痘	7	0.8	2	0.2	4	0.4	2	0.4	4	0.7	8	2.0	27	0.6	-30			7	0.9
	(79) 手足口病	1	0.1											1	0.0	-6			1	0.1
	(80) 伝染性紅斑	2	0.2			2	0.2			5	0.8	5	1.3	14	0.3	3			2	0.3
	(81) 突発性発しん	4	0.4	3	0.3	1	0.1			4	0.7	4	1.0	16	0.4	0			4	0.5
	(82) 百日咳															0				
	(83) ヘルパンギーナ							1	0.2					1	0.0	-2				
(84) 流行性耳下腺炎	6	0.7	4	0.4	2	0.2	2	0.4	1	0.2			15	0.4	-1	3	3.0	3	0.4	
眼科	(86) 急性出血性結膜炎														0					
	(87) 流行性角結膜炎					2	1.0	3	3.0				5	0.5	1					
基幹	(92) クラミジア肺炎														0					
	(93) 細菌性髄膜炎														0					
	(95) マイコプラズマ肺炎			1	1.0							1	1.0	2	0.3	-10				
	(96) 無菌性髄膜炎														0					

は警報、は注意報。「空欄」:患者発生無し。

**III 表II以外の感染症法対象疾患**

(注:届出状況は速報値です)

(9) 結核(二類全数把握疾患):八戸1人

(22年計:81人)

**IV 病原体検出情報**

・病原体情報はありませんでした。

過去の全数把握疾患については、月報をご覧ください。

# 感染症の窓

# 梅毒

(五類全数把握)

表1 梅毒患者数年次推移

	全国	青森県
2006年	625	3
2007年	714	3
2008年	823	2
2009年	676	0
2010年	166	0

\*全国値は第16週現在

表2 保健所管内別累計(合計8人)

保健所名	患者数累計(人)
東地方+青森市	1
弘前	2
八戸	1
五所川原	0
上十三	3
むつ	1

(2006-2010年)

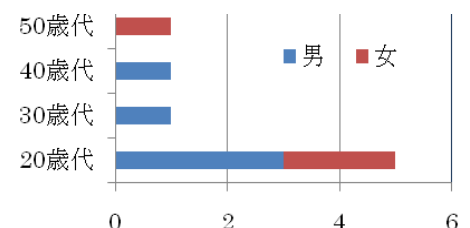


図 性別年齢別割合(青森県:8人)

中国では2008年、先天梅毒の子どもが9,480人生まれていたことが、米医学誌「ニューイングランド医学ジャーナル」で報告されました。現在、中国上海では性感染症の中で最も多く報告されています(5/7AFP通信発表)。日本では2006年以降、2年連続で前年より100人以上増加し、年間600人以上の届出数で推移しています。青森県では2009年以降、届出は無く2006年からの累計は8人です(表1,2)。本県の性別割合では、男性がやや多く、年齢層別では20~50歳代で見られています(図)。梅毒のうち、胎児が母体から胎盤を通じて感染したものを先天梅毒と言います。全国の先天梅毒患者数は2000年以降は、年間3~10人で推移、2006年には12人、2007年は7人でした。本疾患は治療法があることから、妊婦は必ず健診を受け、早期発見に努めることが重要です。